国語教科書における「作者＝宮沢賢治」の位置

―「注文の多い料理店」と「やまなし」の「学習のてびき」の分析を通して―

美作大学　井上　功太郎

１．はじめに

本稿は、国語教科書において、「作者＝宮沢賢治」がどのように位置づけられてきたのかについて明らかにすることを目的としている。

文学作品を「読むこと」の学習においては、「読者論」の影響によって、「読者」を中心とした読みの学習が模索されてきた（松本修 2006、山元隆春 2011）。

そうした「読者」を中心とした学習が一般化していくなかで、「作者」という言葉が観念上の「作者」という意味で用いられはしても、伝記上の「作者」と関連づけて読むことは、ほぼなくなってきている。

しかし、「読むこと」の学習において、例外と言えるのが「宮沢賢治」である。宮沢賢治は、伝記上の「作者」として持ち出されることが多い（牛山恵 2010）。それは、宮沢賢治が多様な面をもち、その様々な面に魅力を見出すことができることが理由の一つであると思われる。

茅野政徳（2014）は、宮沢賢治の「伝記教材」の分析を行い、賢治の人生は自己犠牲や人類愛といった美徳や道徳のモデルにしやすく、時代に合わせて、近代化に対する反発、自然の尊重、郷土への愛情、理想の実現への情熱、その他関連するテーマに焦点を当てることができることを指摘する。

また、葛西まりこ（2005）は、「自然」に対峙する賢治像を提出し、構大樹（2019）は、賢治作品がエコロジーと「雨ニモマケズ」の文脈から受容されていることを指摘する。

一方で、教科書のなかの宮沢賢治は、「隠されたイデオロギー」（石原千秋 2005、2009）として利用されてきたことも否定できない。

宮川健郎（1993）は、子どもと作品をむすびつけたり、切りはなしたりする存在である「教師」と「教科書編集者」を「媒介者」と呼んでいる。

多様な賢治像は「隠されたイデオロギー」として機能しやすく、「媒介者」は、自覚的か無自覚であるか別として、授業のなかで「作者＝宮沢賢治」として読みの帰結点となっている可能性が高いと言える。

ここでは、宮沢賢治の教科書に掲載される作品の「学習のてびき」を分析することで、教科書において宮沢賢治が、「作者」として、どう位置づけられているのか明らかにすることができると思われる。このことを明らかにすることで、国語授業において「作者」をどのように扱っていけばいいのかを考える契機になると思われる。

なお、分析対象は、東京書籍の教科書に継続的に掲載されている「注文の多い料理店」と光村図書の教科書に継続して掲載されている「やまなし」としたい。

「注文の多い料理店」については、他の教科書会社でも掲載されているが、継続して掲載されているのは、東京書籍のみであるのでその対象とした。加えて、東京書籍では一時、伝記教材「宮沢賢治」との関連が図られ、光村図書では現時点で、伝記教材「イーハトーヴの夢」との関連が図られる形になっている。

以下、年号の表記であるが、教科書検定ならびに学習指導要領は和暦を基本としている。そのため利便性を考え、西暦の後ろに括弧づきで和暦を示す。

２．東京書籍「注文の多い料理店」とふたつの「宮沢賢治」

東京書籍の教科書には、1976（昭和 51）年検定版から現在まで、宮沢賢治の「注文の多い料理店」が掲載されている。さらに、採録されていない時期もあるものの宮沢賢治の伝記が掲載されている。

ただ、東京書籍の場合、堀尾青史の「宮沢賢治」と西本鶏介の「宮沢賢治」がある。「注文の多い料理店」とふたつの「宮沢賢治」を学習指導要領と合わせて、整理したものが表１である。

表１　東京書籍宮沢賢治関連教科書掲載一覧

指導要領改訂年	教科書検定	使用年	「注文の多い料理店」	堀尾青史版「宮沢賢治」	西本鶏介版「宮沢賢治」
1968（昭和43）年	1970（昭和45）年	1971（昭和46）年 －1973（昭和48）年	６年上 （教科書番号：6051）	５年下 （教科書番号：5032）	―
	1973（昭和48）年	1974（昭和49）年 －1976（昭和51）年	６年上 （教科書番号：6101）	５年下 （教科書番号：5062）	―
	1976（昭和51）年	1977（昭和52）年 －1979（昭和54）年	５年上 （教科書番号：5131）	５年下 （教科書番号：5132）	―
1977（昭和52）年	1979（昭和54）年	1980（昭和55）年 －1982（昭和57）年	５年下 （教科書番号504）	―	―
	1982（昭和57）年	1983（昭和58）年 －1985（昭和57）年	５年下 （教科書番号：514）	―	―
	1985（昭和60）年	1986（昭和61）年 －1988（昭和63）年	５年下 （教科書番号：524）	―	―
	1988（昭和63）年	1989（平成元）年 －1991（平成３）年	５年下 （教科書番号：534）	―	―
1989（平成元）年	1991（平成３）年	1992（平成４）年 －1995（平成７）年	５年下 （教科書番号：504）	―	６年下 （教科書番号：604）
	1995（平成７）年	1996（平成８）年 －1999（平成11）年	５年下 （教科書番号：516）	―	６年下 （教科書番号：616）
	1999（平成11）年	2000（平成12）年 －2001（平成13）年	５年下 （教科書番号：528）	―	６年下 （教科書番号：628）
1998（平成10）年	2001（平成13）年	2002（平成14）年 －2004（平成16）年	５年下 （教科書番号：504）	―	６年下 （教科書番号：604）
	2004（平成16）年	2005（平成17）年 －2010（平成22）年	５年下 （教科書番号：514）	―	６年下 （教科書番号：614）
2008（平成20）年	2010（平成22）年	2011（平成23）年 －2014（平成26）年	５年下 （教科書番号：502）	―	―
	2014（平成26）年	2015（平成27）年 －2019（平成31）年	５年 （教科書番号：531）	―	５年（付録） （教科書番号：531）
2017（平成29）年	2019（平成31）年	2020（令和２）年 －2023（令和５）年	５年 （教科書番号：501）	―	５年（付録） （教科書番号：531）

「注文の多い料理店」の学習のてびき、また、ふたつの「宮沢賢治」との関係から「作者」がどのように扱われているかを検証し、分類した。大きく、堀尾青史「宮沢賢治」期【1977（昭和 52）年～1979（昭和 54）年】、前期伝記不在期【1980（昭和 55）年～1985（昭和 60）年】、後期伝記不在期【1986（昭和 61）年～1990（平成２）年】、不定期【1992（平成３）年以降】という４つに区分することができる。

以下では、それぞれの「宮沢賢治」の位置づけの特徴を見ていくことにしたい。

２．１．堀尾青史「宮沢賢治」期

1976（昭和 51）年検定の『新編　新しい国語　５上』の「注文の多い料理店」の学習のてびきについてみていきたい。

この間の学習のてびきでは、「作者」や「宮沢賢治」という単語は見られない。

1979（昭和 51）年検定版の「注文の多い料理店」の学習のてびきは次のようになっている。

> ①　二人の男は、どんな生活をしている人たち　でしょう。会話の様子から考えてみましょう。
> ②　注文にしたがっていろいろな行動をする二　人の様子を、思いうかべながら読みましょう。
> ③　戸を開けて進むにつれて、二人の気持ちはどのように変わっていくでしょう。
> ④　東京へ帰ってからの二人の気持ちを考えてみましょう。
> ⑤　場面場面のおもしろさを、ろう読やげきによって表現してみましょう。
> ろう読の仕方
> ○　物語などを朗読するときは、次のことに気　をつけましょう。
> ・場面を思いうかべながら様子や登場人物の気持ちが伝わるように読む。
> ・会話のところは、だれがどんな気持ちで話しているかを考え、相手に話しかけるような気持ちで読む。
> ・ぼう読みにしたり、節をつけたり、むやみに力を入れたりしないで読む。
> ・句点（。）、読点（、）に注意し、息の切り方や間の取り方を考え読む。

表１にあるように、同年に検定されている『新編　新しい国語　５下』には、堀尾青史による「宮沢賢治」と題する伝記が掲載されているが、「注文の多い料理店」の学習のてびきには、そのことは触れられていない。

一方で、「宮沢賢治」の学習のてびきでは、「④　「注文の多い料理店」を読み返してみましょう。賢治の他の作品を読んでみましょう。」とある。

だが、上巻に「注文の多い料理店」、下巻に伝記「宮沢賢治」であり、あくまで、「注文の多い料理店」を「再読」するような格好になる。「注文の多い料理店」の学習で「作者」を意識させることにはならない。よって、テクスト内の情報に基づいて読むという方法が採ら

れていると言えよう。

２．２．前期伝記不在期

1979（昭和 54）年検定版の教科書では、堀尾青史の「宮沢賢治」が姿を消している。そして、大幅な学習のてびきの変更が行われている。

1979（昭和 54）年検定版の「注文の多い料理店」のてびきは、次のようになっている。

> ■同じ作者の他の作品を読んでみよう
>
> 物語などを読んで心をひかれたら、同じ作者のほかの作品を読んでみよう。また、その作者の伝記があったら読んで、どんな人か考えてみよう。
>
> 五年二組では、「注文の多い料理店」を読んだ後、宮沢賢治の作品や伝記を読んでみて、考えたことを話し合った。話し合う前に、それぞれ次のようなメモを用意した。

そして、児童のメモの例と「宮沢賢治」の写真と「雨ニモマケズ」の一部の写真が掲載される形になっている（図１）。

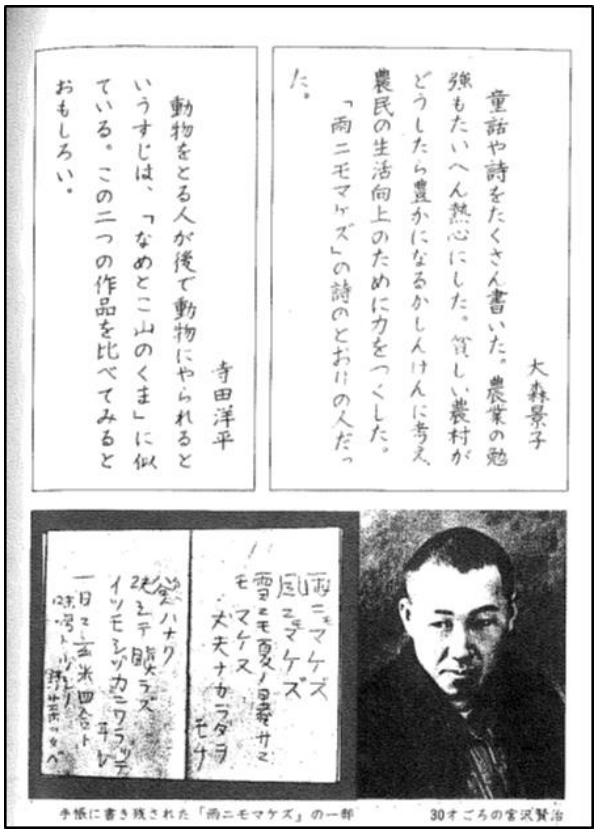

図１　1979（昭和 54）年検定『新編　新しい国語　５下』　p. 112

1982（昭和 57）年改訂検定においても、同様の学習のてびきとなっている。

ただ、学習のてびきとしては、具体的な活動が示されておらず、読書活動につなげていく

ような志向性をもっているとものだと言える。
ただ、少なくとも、「作者＝宮沢賢治」という存在は前面に押し出されている。

２．３．後期伝記不在期

1985（昭和 60）年検定版の教科書では、宮沢賢治の写真は消え、テクスト内情報による学習のてびきが示されている。

場面の変化に注意しながら、登場人物の気持ちを読みとろう。 1　会話に注意して、二人のしんしの気持ちを読みとろう。 ・山の中を歩いている時 ・山猫軒の中に入って、戸に書かれている文字を読みながら、次々と部屋を進んで行く時 ・自分たちが料理されて食べられることが分かった時 ・山猫軒が消えてから 2　この作品を読んで、おもしろいと思ったところについて話し合おう。

1988（昭和 63）年検定版も同様の「学習のてびき」であり、伝記上の「作者＝宮沢賢治」を念頭に置かない形になっている。
前期伝記不在期と同じ学習指導要領の影響下にあるものの、「学習のてびき」が示しているものは、異なっていると言える。

２．４．不定期

1992（平成４）年から現在に至るまで、短いスパンで学習のてびきの変更がなされており、仕分けることが難しい。そのため、「不定期」として、順を追って個別に見ていきたい。
1991（平成３）年検定版は、学習指導要領の改訂・実施のタイミングで編集されたものである。
このタイミングで西本鶏介の「宮沢賢治」が六年の下に掲載されることになる。
1991（平成３）年検定版の「注文の多い料理店」の学習のてびきは、1985（昭和 60）年検定版、1988（昭和 63）年検定版の「１　会話に注意して、二人のしんしの気持ちを読みとろう。」の４項目の「・山猫軒が消えてから」が「山猫軒は消えて助かってから東京に帰るまで」に改められているだけで、ほとんど変化が見られない。
また、西本鶏介の「宮沢賢治」と「注文の多い料理店」との関連は、積極的に図られず、現在までその傾向は継続している。
1991（平成３）年検定版から 1999（平成 11）年検定版までは「主題」という文言が見られる。作品の「主題」を明らかにするために、読むということが行われているが、観念上の「作者」には帰結させようとする意識はみられるが、伝記上の「作者＝宮沢賢治」を持ち出す格好にはなっていない。
2004（平成 16）年では、「主題」という文言は消え、「本のカバーを作る。」「解説ノートを

作る。」「朗読発表会をする。」という３つから学習方法を選ぶという活動中心の学習に転換している。

ただ、2008 年告示の学習指導要領を受けてつくられた 2010（平成 22）年検定版では、「作者」という文言とともに、「物語のおもしろさを考えて読む」として、次のようなコラムも見られる。

> それぞれの物語には、作者がくふうしている構成や表現などがあります。そのようなくふうを読み取ることで、物語のおもしろさを、より深く味わうことができます。
>
> 物語を読むときは、例えば、次のような点に着目するとよいでしょう。
>
> ・構成や展開
>
> ・登場する人物の人がら、行動や心の動き
>
> ・会話文
>
> ・語り口調
>
> ・題名の付け方や題名にこめられた意味
>
> このほかにもくふうはいろいろあります。作者独自のくふうを見つけて、物語を読み味わいましょう。

ただ、ここでいう「作者」は、観念上の「作者」であると言え、伝記上の「作者＝宮沢賢治」とはならないだろう。

同じ学習指導要領下の 2014（平成 26）年検定版では、「作者」という言葉は見らなくなっており、また、2019（平成 31）年検定版でも同様である。

３．光村図書「やまなし」と「イーハトーヴの夢」

光村図書の教科書には、1970（昭和 45）年検定以来、現在に至るまで「やまなし」が掲載されている。

ただし、2001（平成 13）年検定の『国語 六年（上） 創造』以降、畑山博による宮沢賢治の伝記である「イーハトーヴの夢」と題する伝記と併載されている。

「学習のてびき」は通常、教材本文の直後に置かれるが、「やまなし」の本文の直後に置かれず、「イーハトーヴの夢」を挟む形になっている。要するに、「やまなし」→「イーハトーヴの夢」→「学習のてびき」の順になっている。

基本的には、1971（昭和 45）年～2001（平成 13）年までの「やまなし」の学習のてびきでは、独立した作品として読む方向がされてきた。

そのため、2001（平成 13）年検定版の使用以降に限定し見ていくことにしたい。

2001（平成 13）年検定版が使用されはじめた 2002（平成 14）年以降、「やまなし」と「イーハトーヴの夢」との関係が学習のてびきは、大きく４つに区分することができる。

表２　光村図書宮沢賢治関連教科書掲載一覧

指導要領改訂年	教科書検定	使用年	「やまなし」	畑山博「イーハトーヴの夢」
1968（昭和43）年	1970（昭和45）年	1971（昭和46）年 －1973（昭和48）年	６年上 （教科書番号：6051）	―
	1973（昭和48）年	1974（昭和49）年 －1976（昭和51）年	６年上 （教科書番号：6101）	―
	1976（昭和51）年	1977（昭和52）年 －1979（昭和54）年	６年上 （教科書番号：6141）	―
1977（昭和52）年	1979（昭和54）年	1980（昭和55）年 －1982（昭和57）年	６年下 （教科書番号：610）	―
	1982（昭和57）年	1983（昭和58）年 －1985（昭和57）年	６年下 （教科書番号：620）	―
	1985（昭和60）年	1986（昭和61）年 －1988（昭和63）年	６年下 （教科書番号：630）	―
	1988（昭和63）年	1989（平成元）年 －1991（平成３）年	６年下 （教科書番号：642）	―
1989（平成元）年	1991（平成３）年	1992（平成４）年 －1995（平成７）年	６年下 （教科書番号：612）	―
	1995（平成７）年	1996（平成８）年 －1999（平成11）年	６年下 （教科書番号：624）	―
	1999（平成11）年	2000（平成12）年 －2001（平成13）年	６年下 （教科書番号：638）	―
1998（平成10)年	2001（平成13）年	2002（平成14）年 －2004（平成16）年	６年上 （教科書番号：611）※併載	
	2004（平成16）年	2005（平成17）年 －2010（平成22）年	６年 （教科書番号：622）※併載	
2008（平成20）年	2010（平成22）年	2011（平成23）年 －2014（平成26）年	６年 （教科書番号：609）※併載	
	2014（平成26）年	2015（平成27）年 －2019（平成31）年	６年 （教科書番号：639）※併載	
2017（平成29）年	2019（平成31）年	2020（令和２）年 －2023（令和５）年	６年 （教科書番号：607）※併載	

ここでは、単純併載期【2002（平成 13）年～2004（平成 16）年】、関連期①【2005（平成 17）年～2014（平成 26）年】、活動期【2015（平成 27）年～2020（平成 31）年】、関連期②【2021（令和２）年】として、それぞれ見ていくことにしたい。

３．１．単純併載期

2001 年（平成 13）検定版の学習のてびきは次のようになっている。

> ▼「やまなし」は、どんな特色をもった作品だろうか。次のことを考えながら、これまで読んだ作品とくらべて話し合おう。
>
> ・言葉づかいのおもしろさ
>
> ・「五月」と「十二月」のちがい
>
> ▼「イーハトーヴの夢」を読んで、次のことを話し合おう。
>
> ・宮沢賢治の理想はどんなことか。
>
> ・賢治の考え方や生き方についてどう思うか。
>
> ▼宮沢賢治のほかの作品や、自分が興味のある作家の作品を、まとめて読んでみよう。

もちろん、併載というやや特殊な形、平行読書のような格好になっているため、学習者は、宮沢賢治という作者を意識せざるを得ないことは想像に難くない。だが、学習のてびきを見ても「やまなし」の読みを「イーハトーヴの夢」と関連づけながら形成していこうという意図はここからは見られない。

３．２．関連期①

「やまなし」と「イーハトーヴの夢」を関連付けて読ませようという方向は、2004（平成16）年検定のものからである。

2004（平成16）年検定版では、題名と絡められている。

> ▼この作品にどうして「やまなし」という題名がつけられたかを、次のことから考えてみよう。
> ・「五月」と「十二月」を比べて感じたこと、分かったことから。
> ・資料「イーハトーヴの夢」を読んで、作者宮沢賢治の考え方について思ったこと、分かったことから。

2010（平成22）年検定版では、2004（平成16）年検定版のものと、学習のてびきに変更はないが、次のようなリード文が追加されている。

> 作品の一つ一つは、それだけで独立した世界を読者に提示している。わたしたちは、真っ向からそれに向き合い、考えたり味わったりすることで、自分を豊かにする。
> いっぽう、ある作品と出会ったとき、感動したにせよ、よくわからなかったにせよ、「どんな人が書いたんだろう。」「ほかに、どんな作品があるんだろう。」と思うのも自然なことである。このときは、作者やほかの作品とのつながりの中で、作品を味わい直すことになる。
> ここでは、まず、「やまなし」の世界を十分味わおう。そして、資料「イーハトーヴの夢」とあわせて読むと、何かが見えてくるのかどうか、同じ作者のほかの作品もあわせて読むとどうか、どんな読書を体験してみよう。

このリード文が加えられたことによって、より作者というものを意識しながら読むということが求められるようになった。先に掲げた2010（平成22）年検定版の学習のてびきのリード文は、「伝記」が「言語活動例」として示された学習指導要領の影響を直接的に受けたものだと推察できる。

３．３．活動期

2014（平成26）年検定の『国語　六　創造』では、「朗読で表現しよう」という学習過程のひとつ目として、「❶資料「イーハトーヴの夢」を読んで、作者である宮沢賢治の生き方や考え方を知ろう。そして「やまなし」に通ずるところがないかを考えよう。」となっている。「イーハトーヴの夢」から「作者である宮沢賢治の生き方や考え方」を見つけ、「やまなし」との共通項を発見させるという学習過程である。

ただ、「朗読で表現する」ことが主たる活動であり、2001（平成13）年検定版、2010（平成22）年検定版と異なり、「作者」を音読のための一過程として位置付けている。これは、観念上の「作者」であり、「宮沢賢治」とは直接に結びつかない。

３．４．関連期②

2019年（平成31）検定版では、学習のてびきに「・作者がこの作品にこめた思いについ

て考え、どのような点からそう考えたのかを明らかにして文章にまとめよう。」(p. 125) という文言が見られるが、これは「まとめよう」の下位項目であるが、「とらえよう」で「イーハトーヴの夢」からわかる宮沢賢治像をとらえ、「やまなし」と関連づけて「まとめよう」という意図があるように見える。下段には、次のようなものが見られる。

> くわしく読んだことをもとに、次のようなことから考えよう。
> ・独特な表現から受ける印象
> ・「五月」と「十二月」を比べて
> ・題名から想像されること
> ・宮沢賢治の生き方や考え方をふまえて　　など
> 〈書き出しの例〉
>
> > ・作者は、読者に――を伝えたかったのだと思う。
> > ・作者は、この作品で、――を表現したかったのではないかと考える。
> > ・私は、――の部分に、作者の思いが最も表れていると思う。それは、――ということだ。

例示的ではあるものの「宮沢賢治の生き方や考え方をふまえて」というのは「イーハトーヴの夢」と関連づけて読みを形成することを念頭に置いている。

４．教科書から見える「作者」概念

以上、東京書籍と光村図書の小学校国語教科書に掲載される宮沢賢治関連教材について、「学習のてびき」からその変遷を見てきた。そのことをもとに、どのように「作者」というものが位置づけられているのか、整理してみたい。

４．１．東京書籍の「作者」概念

「注文の多い料理店」と堀尾青史版「宮沢賢治」は、同じ学年に置かれていたが、「注文の多い料理店」は上巻、堀尾青史版「宮沢賢治」は下巻と、それぞれ独立しており、「注文の多い料理店」にとっては、あくまで「再読」を促すものでしかなかった。

それが、前期伝記不在期になると、「注文の多い料理店」の「学習のてびき」は、伝記的な事実から作品を逆照射するような「作者」概念を用いるようになる（図２）。

「内包された作者」(ブース) を生身の「作者」として結びつけて読むという方法である。「内包された作者」について、ジェラルド・プリンス（1991：85-86）は次のように述べている。

> テクストから再構成される作者の第二の自我（author’s second self)、マスク、あるいはペルソナ (persona)。諸情景の背後に控え、テクストの意匠やテクストが保持する価値

観・文化的批判に責任を持つと考えられるテクストの中の作者の明確なイメージ（W.Booth）

テクストに内包された作者と現実の**作者**（author）は、区別されなければならない。

（―中略―）

物語テクストの内包された作者は、また**語り手**（narrator）とも区別されなければならない。

しかし、前期伝記不在期は「作者」と「内包された作者」、「語り手」とも区別されずに読む読み方である。これは、伝統的な読みの方法であるとも言えよう。

ただ、1986（昭和 61）年検定版以降は、自伝的なものを呼び出さない「学習のてびき」になっており、1991（平成３）年検定版で、西本鶏介版「宮沢賢治」が掲載されてからも、その方向性に変化は見られない。

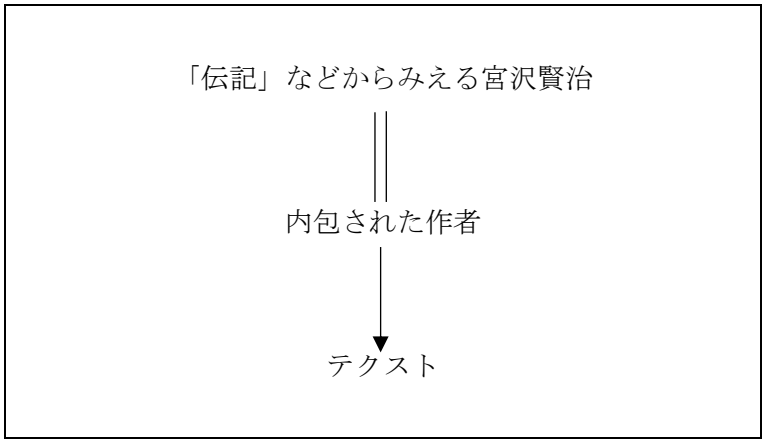

図２

1991 年（平成３）検定版からは、「作者」や「主題」という文言が「学習のてびき」のなかに示されるが、「宮沢賢治」という文言はなく、あくまでも観念上の「作者」という様相が強い。

４．２．光村図書の「作者」概念

「やまなし」は、はじめ独立した一つのテクストとして掲載されていたが、1998 年改訂、2002 年実施の学習指導要領の影響下にある 2001 年検定版から「イーハトーヴの夢」が併載されるようになる。この変化の経緯について、学習指導要領からの影響をみることは難しい。むしろ、複合的な要素によって、このような併載の形がとられたと推察できるが、「学習のてびき」から見ると、それぞれが独立した教材としての扱いであった。

それが、2004（平成 16）年検定版以降の「イーハトーヴの夢」から見出された「作者＝宮沢賢治」の思想を「やまなし」の読みに生かしていくという指向性になっている。そのこと

は図３のように示すことができる。

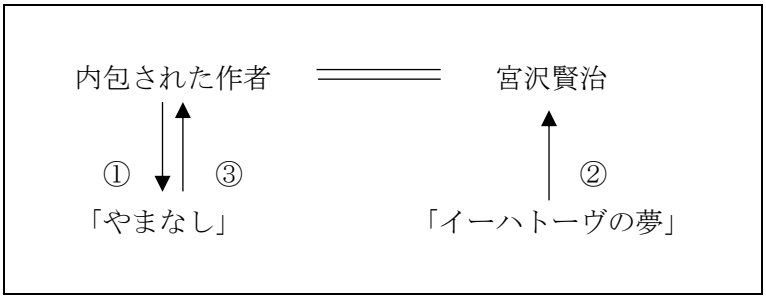

図３

2004（平成 16）年版以降の「やまなし」と「イーハトーヴの夢」の「学習のてびき」の変更は、「作者＝宮沢賢治」であるという面に加えて、教材としての難しさに起因し、自伝的な面を持ち出し、読みの帰結点としようとしたのではないかと思われる。2019 年（平成 31）検定版以降も伝記的な「作者」を持ち出す方向を維持している。

５．おわりに

ここまで、「注文の多い料理店」と「やまなし」の「学習のてびき」の変遷から、国語教科書における「作者＝宮沢賢治」の位置づけについて考えてきた。

東京書籍では、「作者＝宮沢賢治」の「伝記」から作品を逆照射して読むようなものから作品から読み取ることのできる観念上の「作者」を置く形に変化していっている。

光村図書では、「やまなし」をテクスト内情報によって読もうという指向性をもったところから「伝記」を活用して「やまなし」を読む方向にシフトしている。これは、外的なシステムとして「作者」を子どもたちのなかでに意識させる。

「注文の多い料理店」と「やまなし」の「作者＝宮沢賢治」の位置づけは、どのような読みの形成を目指すのかという違いであると言うことができる。

最後に、もう一人の「媒介者」である「教師」の側から残された課題について述べて稿を終えたい。まずもって、その「伝記教材」のもつ誘導性には注意が必要であろう（牛島恵 2012）。

誘導性に気づかないままで「教師」が授業を行った場合、「伝記」の主観的な記述が権威性をもち、教室で支配的になる恐れがある。また、「教師」が多様な賢治の一部分に着目し、それを教室で権威的にしてしまう可能性もあるだろう。次に、観念上の「作者」ということを十分に理解していないままに「作者」という文言を用いてしまう場合である。

作品を通じて見出した「内包された作者」を生身の「作者」と混同し、第２、第３の同一作者の作品を読んだ場合、同一性という枠組みによって、例外的なものを捨象する可能性が

ある。

実践レベルにおいて、子どもたちのなかに「作者＝宮沢賢治」が浮かぶとき、教科書という外的なシステムよりも、教師が外的なシステムとして働いていることが多いのではないか。二人の「媒介者」が交わる授業実践の場における「宮沢賢治」の扱いについては別の機会に考えていきたい。

付記

本研究は、2023 年度美作大学職員研究助成「国語科授業における「作者」概念の問題」の成果である。

文献

石原千秋（2005）『国語教科書の思想』ちくま新書

石原千秋（2009）『国語教科書の中の「日本」』ちくま新書

ウェイン・C・ブース（1991）『フィクションの修辞学』書肆風の薔薇

ジェラルド・プリンス（1991）『物語論辞典』松柏社

牛山恵（2010）「小学校国語教科書における宮沢賢治関係の教材史研究」『月刊国語教育研究　№454』日本国語教育学会　pp.50-57

牛山恵（2012）「宮沢賢治童話の教材史―文学作品と小学校「国語」教科書との関連―」『全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット②国語教科書研究の方法―国語教材の変遷を考える―』全国大学国語教育学会　pp.45-60

葛西まり子（2005）「国語科教科書の中の「宮沢賢治」―「伝記教材」を視点として」『藝文研究』88 pp. 45-53　慶應義塾大學藝文學會

構大樹（2019）『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』大修館

茅野政徳（2014）「戦後小学校国語検定教科書における宮沢賢治の伝記教材の変遷」『国語科教育』全国大学国語教育学会　第 75 集　pp.32-39

松本修（2006）『文学の読みと交流のナラトロジー』東洋館

宮川健郎（1993）『国語教育と現代児童文学のあいだ』日書

山元隆春（2011）『文学教育基礎論の構築　【改訂版】CD-ROM』溪水社